

秋庭太郎著

考證永井荷風

岩波書店刊

考證 永井荷風

昭和四十一年九月十日 第一刷發行 ©
昭和四十一年十一月二十日 第二刷發行

定價千三百圓

著 者 秋 庭 太 郎あき ば たい ちやう

發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

精興社印刷・三水舎製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

出生まで	一—六
明治時代	六—三三
大正時代	三三—五九
昭和二年から二十年まで	五九—六五
昭和二十一年から死まで	六五—七三

その一

わたくしがニューギニアの戦場から六年ぶりで老父母の東京の家に歸還したのは終戦の歳の十一月末であつた。變火は都内全域を殆ど燬盡したが、疎開もしなかつたわたくしの留守宅は不思議と焼け残つてゐたのである。

昭和二十一年丙戌秋九月、齡七十の老父は、妻子もないわたくしの身輕さをよしとして曝書の手傳ひをしてくれと申出た。書物は戦争で幾年か本箱諸共麻縄で括結つたまゝ放置してあるのだからともいふのである。父の祖父は北總の人、秋葉三太夫義之といひ、黒川春村に學び、同門の金子眞頼と並び稱せられた逸材であつた。師春村が北總飯沼村里正秋葉義之方に滯留したことが『秋葉家譜』に見えてゐるが、幕末の頃、義之は黒川家よりのぞまれて養子縁組のはなしがあつたものゝ秋葉家の後嗣なる故を以て果さず、後に金子氏が入つて黒川の家學を繼いだ。明治の國學者黒川眞頼が即ちそれである。わたくしの家に傳來の國書漢籍の多く有つたのも、さうした關係からで、わたくしが青年の頃にみた藏儲中に木活萬葉集、舞の本三十數番、宋板論語などのあつたことを憶えてゐる。老父も亦祖父に肖て蒐書の僻があり、躬ら集めた古書詩幅のたぐひも尠くない。わたくしも年久しく是等家藏の書に接しなかつたし、

且は未見の載籍もあらうかと、なかば好奇心から右の如き父の申出を諾うたのである。

都内に住みながら倅ひ家も燬かれず、廣くもない座敷に歩く隙間もないほどに何年ぶりかで老父と俱に大いに古書を曝し得たよろこびはたとえやうもなかつた。わたくしは曝された幾多の古書幅物書畫帖類の中に、適文反故らしい一束を見出したので、之を丁寧に檢してみた。それは山本北山、狩谷極齋、菊池五山、藤森弘庵、寺門靜軒、成島柳北、大沼枕山、小野湖山、信夫如軒、森春濤、鷺津毅堂、猪瀬東寧、日下部鳴鶴、福島柳園等、幕末から明治にかけての文雅の士の詩牋色帋尺牘など、凡そ百點近くにも及んだであらうか。その中に交つて永井久一郎とある人の古手紙二通があつたので、傍らの老父にその如何なる人なるかを問ふた。父は「荷風のお父さんだよ。」と教へられ、別に久一郎（禾原）の著『西遊詩』『觀光私記』なる唐本仕立の二書を示された。

二通の書翰の認ためられた歳は詳かでないが、何れも明治三四十年代の久一郎が實業界に活躍してゐた時分のものたることだけは推測し得る。即ち一通は或年二月十八日附、久一郎の末弟久滿次の養父大嶋正人宛のもの、某家婚儀の結納目録に就ての問合せの消息であり（寫眞二）、別柬は某年三月二十八日附、岡視學官宛のもので、日本郵船會社々員井本某なる人小學校教員の件につき御願の儀あり、御引見下さる様にとの紹介狀である。二通とも内容的には特に記すべきものではないが、趙子昂の書體を善くした禾原久一郎の認ためたものだけに流石に見事な筆蹟である。

わたくしは、この禾原の尺牘と『西遊詩』『觀光私記』に加へて、家藏本の『竹溪先生遺稿』『春濤詩

鈔』大沼枕山著『江戸名所詩』を誦讀するに及んで、更に無限の興趣をおぼえたのである。それは大正十五丙寅歳に永井荷風が刊行した『下谷叢話』の文雅の世界がおのづから事新しく想ひ返されたが故である。『下谷叢話』に由れば、枕山は北總出遊の際、みづかいどろ水海道みづかいどろの秋場桂園を訪ねてゐるが、桂園はわたくしの家と同族であり、水海道のその家には、今猶秋場桂陰、桂園父子に宛てた藤森天山、大沼枕山、鷺津毅堂等の書翰が残つてをり、また荷風の外祖父毅堂が結城藩に教鞭を執つたことが叢話に記されてゐるが、わたくしの祖父も若年の砌り、毅堂に學んだ事が『秋庭系圖』に見え、更に枕山が蓮花の飯沼に舟を浮べて詩を賦したといふ飯沼村はわたくしの宗家の在る處、秋庭氏即秋葉氏は寛永以來飯沼の名主であつて、享保時には飯沼を開墾、七十餘町歩の美田となしたが、『下谷叢話』の一篇は、わたくしにとつて興味の津々たるものがあつた。爾來わたくしは幕末明治の詩文集に經目することを懈らなかつたばかりでなく、年所を經るに従つて、竟に永井荷風の傳をつくる氣持にすらなつた。周知の如く『下谷叢話』は、著者荷風の遠縁に當る東武の詩人大沼枕山を中心に江戸下谷界限に遊息した文人墨客の事蹟を考證、併て荷風の外祖父鷺津毅堂の行狀をも審かにしたものである。然しながら著者荷風は永井一族に關しては殆ど觸れるところがなかつた。依つてわたくしは荷風の傳を立つるに際し、鷺津の家に就ては簡略を旨とし、永井一族に關しては努めて精緻たることを期した。

その二

尾張國丹羽郡丹羽村の郷士に鷺津氏なるものがあり、系は丹羽縣主稻萬侶より出で、稻萬侶の後裔二郎左衛門尉直光なるもの知多郡鷺津の地頭となり、因て氏となした。數世の孫甚左衛門諱繁光のときに丹羽村に居住し、それより數代を経て、享保十一年丙午に生れ、寛政十年戊午十月十七日七十三歳を以て其家に終つた鷺津幸八なるものがあつた。幸八諱は應、字は子順、また子雲ともいひ、幽林と號した博學多才の學者であつた。幽林は文學を以て聖護院親王の召に應じ京師に出で侍讀となつたが、寶曆年間に丹羽村に歸り有鄰塾を創め徒に授けた。學名德望四方に聞こえ、入門する者多く、天明三年には藩校明倫堂の教官として召されたこともあつた。幽林の配原氏さん參は尾張侯の臣原芝助の長女、文化十二年乙亥二月六日に歿したが、幽林參夫妻に四男一女があつた。長男名は典、字は伯經、通稱は次右衛門、竹溪と號した。次男名は吉、又の名は貞輔、分家し丹羽貞輔となり、その配は木下氏。二子があつたと鷺津系圖に見える。一子は義圓、淺井村觀音堂の住職、次子は名不明、妙興寺清涼庵住職と見える。この義圓尼は、明治十年五月三十日付の蓉裳宛穀堂書簡中に見える人物であらうか。三男名は混、字は子泉、松隱と號した。この松隱は父幽林が晩年の通稱九藏を名乗り、丹羽村の鷺津家を相續した。四男名

は茂、又基祐ともいひ、通稱次郎右衛門、杉井と號し、別に槐陰と號したが、後に兄大沼竹溪の家を繼いだ。女兒某は早世した。

幽林の嫡子竹溪典は家を繼がず、寛政の初め江戸に出で、幕府御廣敷添番衆大沼又吉の養子となつた。晩年致仕し、文政十年丁亥十二月二十四日六十六歳を以て歿した。大沼竹溪は化政度の江戸の詩壇に知られた人である。江戸の詩界に覇を握つてゐた菊池五山は、その著『五山堂詩話』巻九において竹溪を「傲骨峻嶒、詩ヲ論スルコト尤精嚴ナリ。人多ク指撻ヲ蒙ル。余騷壇ニ相逢フ毎ニ隱トシテ一敵國ノ如シ。」と評してゐ、竹溪の才識のほどが窺ひ得る。『竹溪先生遺稿』が世に行はれてゐる。この竹溪の子が幕末明治の詩人として知られた枕山大沼厚であつて、江戸下谷御徒町拜領屋敷に於て文政元年戊寅三月十九日に生れた。即ち枕山は竹溪の晩年の子である。枕山は五山の高弟で、嘉永二年五山歿後、江戸詩壇の領袖であつた。竹溪の末弟基祐が四十四歳で兄大沼竹溪の養子となつたことは既に述べたが、此人は詩文の傍ら俳諧をも善くした。何故に嗣子捨吉の枕山が其家を繼がなかつたのであらう。この事は荷風も亦『下谷叢話』において、「わたくしの知らむと欲して未知ることの出来ない大事件である。」としてゐる。而も典が大沼家を嗣いで幕吏となつた事を『下谷叢話』の著者は鷺津家所藏の系圖によつて知つたといひ、また文化九年及び同十三年の『武鑑』に大沼次右衛門の名を西丸附御廣敷添番衆の中に見出したとも同書に述べてゐる。わたくしも文政三年の『武鑑』に、「御廣敷添番衆大沼次右衛門、百俵高、麴町三丁目」と記載されてあるのを見た。これに由つてみれば、典が幕府に出仕したのは少くも文

化九年以前で、致仕したのは文政三年以後のことであらう。

幽林の三男松隱が丹羽の鷺津の家を相續したが、松隱も亦詩文に長じて、その家塾を繼いだ。生來蒲柳にして多病であつたゝめか、老莊の書を好み、人生を諦觀せんとしたものゝ如くである。天保六年大沼捨吉が叔父松隱の家塾に寄寓した時は、松隱は隱居して其嫡子德太郎が門生に教授してゐた。松隱は翌天保七年丙申九月十四日に歿したのである。松隱の配は丸井氏登喜、文久元年辛酉四月十五日に死した。德太郎名は弘、字は德夫、益齋と號し、その家塾を有鄰舎と名けた。考證の學に長じたが、惜むらくは多病であつた。妣磯貝氏貞との間に二男一女があり、伯は文政八年乙酉十一月十七日に生れ、通稱郁太郎、後に貞助又は宣光、維新後九藏とも稱した。名は監、字は重光、また文郁、毅堂と號した。是が即ち荷風の外祖父である。重光の字は毅堂が嘉永六年癸丑に上總國久留里藩主黒田豊前守に聘せられ、下谷御成道の上屋敷に出仕して十年餘勤續した當時に用ひてゐたものらしく、之をわたくしは文久二年壬戌上梓の川田剛編『盍簪社古文偶評』所收の毅堂略傳によつて知つた。次は女子雪枝、小塚利藏なるものに嫁し、その子は明治に及んで大阪の實業界に活躍した。叔は天保四年八月一日に生れ、通稱五郎、名は光恭、字は子禮、蓉裳と號した。鷺津の家には益齋の弟又三郎があつたが、後に叔父大沼次郎右衛門基祐の家を繼いで、大沼姓を冒し、下田奉行手附役から、次いで神奈川奉行手附役に轉じ、横濱に住し、文久三年六月、其地に終つた。享年四十又六。

その三

幽林が意を仕途に絶ち、郷に在つて書を読み、徒に授け、その子松隱、その孫益齋相繼いで家學を守つたが、惜むらくは益齋は年を享くること三十九にして、天保十三年壬寅十一月二十八日に世を去つた。その家には未亡人貞と十八歳の毅堂と十歳の蓉裳と女子が残された。益齋門下の逸材、尾張いちのみや一宮の人春濤森魯直の哭益齋先生なる挽詞二首の一に、「筆牀茶竈付塵絲。著錄何惟數卷詩。名世文章蘇玉局。散人蹤迹陸天隨。無情松下土三尺。有恨風前梅一枝。猶記命宮磨羯語。鶴南飛罷笛聲悲。」とあるが、この律詩の後聯に註を附して、「秉彝錄五卷近日就緒」とあるものゝ、これは上木されずに了つた。益齋の著書に『益齋先生文稿』『益齋詩稿』『世說集解』『世說新語補』『中庸集說』『七才子詩句解』『美人五十詠』等があるが、是等も刊刻せられなかつたやうである。益齋のみならず幽林松隱の遺墨と詩文藁の多くは石黒萬逸郎著『有鄰舍と其學徒』が上梓された頃には鷺津蓉裳の子順光が所藏してゐた。

春濤は初め詩を益齋に、次いで梁川星巖に學び、壇坫を名古屋に張り、明治七年甲戌十月、五十六歳の時に東京に移り、下谷摩利支天街に居を構へ茉莉吟社を開き、『新文詩』を編輯、宋明の詩を排して清詩を鼓吹し、その清新艷麗の調は都下を風靡し、詩名天下に高く、世人は枕山湖山と併稱して三大家と

なした。春濤は明治二十二年十一月七十一歳を以つて歿したが、嗣子は即ち槐南森大來である。春濤門下は多かつたが、荷風の父禾原、叔父阪本蘋園も春濤に詩を學んだ人々である。春濤には『高山竹枝』『東京才人絶句』『舊雨詩鈔』『清三家絶句』『春濤詩鈔』等の著があるが、先師益齋の學恩を深く銘し、後年益齋に對する寄懷の詩十數首を自己の詩集に載せ、また益齋の嫡子毅堂とも交通したことは應酬の詩によつても明らかである。荷風は春濤を好ましき詩人とみてゐたらしく、其著『下谷叢話』の卷頭に外祖父鷺津毅堂と俱に春濤晩年の肖像を掲げてゐる。

毅堂は三禮を以て世に著はれた學者であつた。その學は師猪飼敬所に出たものである。毅堂の事蹟は蒲生重章の『近世偉人傳』所收の鷺津毅堂傳、及び三島中洲撰するところの碑銘に盡きてゐる。重章、中洲俱に毅堂の朋友であつた。その碑銘に曰く。「君幼穎悟。受庭訓。畧通經史。年二十。考既亡。將奉遺命遊學。妣戒之曰。吾門中圯。汝當勉學再興。不然吾不子視汝因手剪紅白帛。結之襟。以備遺志。君泣而拜之。赴伊勢從學敬所猪飼氏。既而遊江戸。入昌平黌。嘉永癸丑應久留里藩。受十口糧。既有勸仕尾張藩者。以義謝之。安政甲寅卜居徒士街。教授生徒。文久中。上書論藩政。不報。遂致仕。時幕政日非。內憂外患交至。君遵養自晦。諸藩欲厚祿致之皆不應。會有尾張藩侯之召。君翻然奉命曰。吾今隱士。執仕不可。況父母之國。即日治行李。赴藩。爲侍讀。受米一百五十苞。未幾加五十苞。轉教授。尋爲督學。大董釐學政。慶應丁卯冬。德川慶喜公還大政于朝廷。退大阪詔召藩侯爲議定官。君扈從在京師。適聞妣病告歸則已屬纊矣。家居服喪。侯以國事日急。奪情起之。再上京。是時朝廷既得政權而財用無所

入。將課之列藩。而德川氏封額尤大。乃詔侯就論之。侯途罹疾。使藩老成瀨隼人正代往。君實從焉。慶喜公奉命。而部兵在伏見者激怒。事將破。君以順逆利害。說其吏塚原但馬。永井主水却之大阪。二氏承服。乃歸京復命。而兵未遽却。實明治紀元戊辰正月元日也。越三日伏見之變果發。東兵敗北。慶喜公遜于江戶。侯請歸藩。誅姦臣與賊通者。君與有力焉。增賜百苞。侯奉勅勸鄰藩勤王。君又與其事。夏賊入甲信境。侯出征。君從參機務。既平。朝廷徵君拜權辨事。己巳春。扈車駕幸東京。秋轉大學少丞。尋遷登米縣權知事。適淫霖驟冷。五穀不登。君百方救濟。一縣得無餓殍。庚午夏敍正六位。無幾免官。此歲朝廷賞功。賜祿一萬五千石于藩侯。侯分與一百五十石于君。以其輔翼有勞也。辛未拜宣教判官。既又歷任權大法官。官廢而罷。又起爲司法少書記官。辛未夏。列東京學士會員。十五年壬午秋。臥病于家。就拜司法權大書記官。敍勳五等。賜雙光旭日章。十月五日特旨敍從五位。是日卒。年五十八。葬谷中天王寺賜儀衛兵送之。故舊門人會者車馬屬于道。觀者歎息。謂儒者未曾有之榮。」云々。

毅堂は慶應元年十一月十六世尾張藩主義宜の侍讀となつて明倫堂の學制改革に當つたが、毅堂の制定した「明倫堂讀書次第」に、『水戸弘道館述義』『新論』『大日本史』『西山遺事』等を採用してゐるところをみると、毅堂が水戸學を奉じてゐたことが分る。明治二年板『官員錄』に據れば維新後毅堂鷲津九藏は東園宰相中將、久世前宰相中將、滋野井中將、千種中將、山本少將、平松甲斐權介、戸田大和守等と共に太政官權辨事に任命された。毅堂は家族を名古屋に留め、單身三條河原の客舎に寓してゐた。これを振り出しに毅堂は明治新政府の役人として順調な歩みを續けたのである。子供運にあまり恵まれな

かつたが、役人としては比較的幸ある生涯であつた。碑文に「時洋學盛行。從事舊業者。晨星寥寥。因更加重野成齋中村敬宇坂谷朗廬等數人結社。修夙好。而朗廬先亡。君繼之。斯文將墜地。」の一節を睹るが、所謂文明開化の時、澎湃として起つた洋學に對抗して毅堂が同志と共に漢學の再興に盡瘁したことが知られ、毅堂逝いて「斯文將墜地」の語は蓋し過賞ではなく、以て當時毅堂の漢學界に於ける地位を窺ひ得る。大正四年十一月十日御大典に際し正五位を贈られた。毅堂には『薄遊吟草』『毅堂集』『親燈餘影』『金山仙吏私記』等の著作があり、皆世に行はれてゐる。

中洲の撰文は豐碑に刻せられ、毅堂の一周忌に向嶋白鬚神社境内に建てられた。除幕の式後、會する者は八百松樓に登つて宴を開き詩を賦したが、此日の感慨を抒した森槐南の長詩は中洲の碑文の補遺とするに足るとは『新文詩』別集所載の小野湖山の批評である。

毅堂行實の大略は右の如くであるが、猶補ふべき事がある。それは毅堂が久留里藩から十人扶持を受ける以前、江戸に在つて時事を論じ、海防に關する著作をなして幕府に皆まれたことである。「鷺津宣光傳」には、「當此之時。海警方棘重光乃抄魏源聖武記名聖武記探要私刻以頒同志。幕吏欲中以法。重光乃避之房總。」とあるが、藤森弘庵とも交あり、毅堂は、はやくより國事に強く關心を寄せてゐた。

毅堂には四男二女があつた。長男精一郎、字は文豹、安政二年乙卯九月七日に生れた。母は佐藤氏みつ、安政五年戊午八月十一日幼兒精一郎を残して急死した。現在谷中鷺津家の墓域に葬られてゐる。「鷺津宣光配佐藤氏之墓」とある碑が即ちそれである。次女恆は文久元年辛酉九月四日に生れた。母は

毅堂の繼室、豊前中津藩士川田良兵衛の二女美代である。長女友は文久二年壬戌十一月二十三日、二男松二郎は元治元年甲子八月十三日に何れも襁褓の中に死した。明治の世に至つて調製せられた下谷區の戸籍簿には恆を長女と記してあつたさうである。三男俊三郎は慶應元年乙丑十二月七日誕生、長じて醫を志し、東京大學醫學部在學中、明治二十四年六月二十九日年二十六を以て夭折した。友、松二郎、俊三郎の墓碑は何れも谷中鷺津家の墓地内に在る。四男留次は慶應四年正月に生れ、明治三年六月名古屋に於て殤した。その墓碑が谷中の塋域にないのは、名古屋に於て歿したからであらう。因みに永井威三郎博士のもとにある毅堂手記の「親類書」に留次を留之助となしてゐる。かくの如く毅堂の男子は多く早世したのである。わたくしが、さきに毅堂は子供運に薄かつたと云つた所以である。猶鷺津家の墓地は最初谷中三崎町天龍院に在つて、みつ、ゆう、松二郎は此處に葬られてあつたが、大正時代に現在の谷中墓地に改葬されたものらしい。

毅堂の弟蓉裳、通稱五郎は兄に代つて丹羽の有鄰塾を繼いだが、資性深沈寡黙にして母貞に仕へ、鈴木氏ぶんと間に明治三年庚午二月二十六日に生れた男子順光があつた。蓉裳は青年時に江戸昌平齋に入り、藤森弘庵に學んだが、安政五年歸郷して家塾に諸生を教へた。尾張の學者細野要齋の『感興漫筆』に年齒二十八の蓉裳の有鄰塾に於ける講義ぶりをば、「五郎江戸に遊學し、父祖の業を繼ぎ諸生を教授す。門内に諸生の舍二字あり。講堂は玄關より入て二間あり。屋柱古色あり。此日孟子の講中也。聽衆數十人席に滿つ。」と書留めてある。蓉裳は明治元年春、明倫堂教授となつた。明治二十六年五月十二日、

六十一歳を以て歿し、その子順光が家學を繼いだ。現在大江川畔に在る蓉裳記念碑は、明治三十二年二月門人二百餘名によつて建てられたものである。

その四

穀堂の女恆が穀堂の門生禾原永井久一郎と結婚、長子荷風永井壯吉を生んだが、わたくしは禾原荷風父子及びその一族を語るに先きだち、永井氏の家系に就いて述べねばならぬ。

永井氏の祖は桓武天皇二十二代の孫參州大濱の住人、長田平右衛門平直吉長男長田傳八郎直勝である。直勝に就ては弘前高等女學校長であつた永井氏の族人、永井直好なる人が大正十年九月に印行した『右近大夫永井直勝公傳』及び昭和三十九年十二月に出版した鈴木成元著『永井直勝』に詳かである。『永井直勝公傳』の冒頭に、「我遠祖右近大夫永井直勝公は平姓にして通稱を傳八郎と云ふ。永祿六年三河國碧海郡大濱の羽城はしろに生る。父は長田平右衛門直吉、母は鈴木氏彌右衛門某の女にして其の第二子なり。祖父長田喜八郎廣正に至り始めて徳川氏に仕ふ。公十四歳の頃徳川信康卿に仕へ昵近せらる。信康自裁後大濱に在りしが、天正八年家康に仕ふ。命に従て平姓長田を大江姓永井に改む。」云々とある。一説に直勝は幼にして親と死別し、縁者の長田直吉に養はれ、直吉の養子となつたといふ。現在直勝の誕生地大濱町の金龍山寶珠寺には大正四年十一月に大典記念として建てた「永井直勝生誕地、愛知縣」背面に「従六位法學士永井直好書」となした丈餘の碑が在り、直勝の肖像畫が寺寶となつてゐる。猶、また